

2015年12月13日 礼拝メッセージ

聖書箇所 マルコ2:1~14

主題 忘れられた人

私の周りにはひとりがちな人が結構います。ひとりぼっちの人、という意味です。たまにそういう人に電話すると最低1時間は話し込むことになります。ですからそういう場合、散歩しながらとか、家で筋トレをしながらとか、料理をしながらとかで話をし続けます。たいていは、つまらないことをしゃべるに違いないと思って、完全に悔って話を聞いてしまうのですが、不思議なことに途中から、この人は面白いことを言っているのではないかと思ひ始め、いつのまにやら感心させられることになっているのです。ですから、私に相談に来る皆さんは決してこう言うてはならないのです。「こんなことで煩わせてすみません。」とか、「いつも変な話ですすみません。」とか言わなくていいのです。私にとって皆さんのお話はとっても勉強になるのです。

ただし、私に話しても「問題は決して解決できない」ということだけは覚えておいてください。わたしがするアドバイスなんて当てにならないし、いきあたりばったりなことも多々あるのですから。もしも万が一、いい結果が出たとしたら、それこそ何かの間違いです。しかしながら、これを神学用語で「神の溢れる恩寵」と言ってもいいのではないのでしょうか。

さて、今日の箇所は有名です。イエスがある人の家で教えていると、一人の病人が連れて来られ、屋根からつりおろされた、というのです。そして、その人にイエスは「あなたの罪は赦された」と言っただけではなく、「起きて、布団を持って、帰れ。」と言って、彼をいやされたのです。イエスはなぜ先に「罪は赦された」と言って、「起きて、布団を持って、帰れ。」を後にしたのでしょうか。罪の赦しが一番大事だ、と教えられた私であれば、病気なんか治らんでいい、先にとりあえず救われとけ、と言う意味でヨハネのように「悔い改めなさい。天の御国は近づいた」と言うか、もっと極端に「あなたは早く信じないと地獄に行くよ。」と言ったかもしれません。しかし、イエスはそうではありませんでした。たぶん違う意味で「あなたの罪は赦された」と言ったのではないのでしょうか。

今日この箇所を読みながら強く思わされたのは、もしかしたら、イエスはこの病人、いやされなくてもよし、と思ったのではないか、ということでした。つまり、この人は十分幸せなのではないか、ということです。考えてみれば、そのとおりです。彼は中風で動けないのに、その彼をあわれんでか、命令されてかわからないけれども友達か、使用人が彼を運んできてくれたのです。しかも、あきらめずにイエスの目の前までつりおろしてもらい、直接会えたのです。彼には少なくとも彼を気にかけてくれている人が4人はいるということなのです。確かに病気が苦しい、それが原因で離れた人がいるかもしれない、けれどもこの男は絶対に幸せ者だ、と私は思うのです。イエスはこの男を見て、あわれんだでしょう。病人とは言え、罪に苦しむものなのですから。だから「あなたの罪は赦された」と言いました。しかし、病気を治す必要まであるとは思っていなかったのではないのでしょうか。

ではなぜこの「すでに幸せな男」をいやしたのか。これははっきりしています。律法学者たちのためです。つまり、主イエスは自分を非難する律法学者たちが少しでも神を知ることができるようにと、彼らのためにこのいやしを行ったのです。なんという愛だ、と思いませんか。主イエスは自分の敵のために、この男をいやして見せたのです。けれどもこの律法学者たちでさえも仲間がいました。彼らも少しは信頼できる人間がいたということです。とにかくこんな主イエスを人々、つまり、律法学者もまじえた群集は夢中で追いかけました。そしてその彼らにもイエスはちゃんと教えられました。

私ならどうでしょうか。中風の人をあわれむかもしれない。けれども、「あんたは幸せもんだ。罪を悔い改めて赦されなさい。」とは決して言わないでしょう。まずいやすと思います。そしてほかの人については適当にあしらったかもしれません。律法学者などは絶対に無視していると思います。あんたらなんかの話を聞いてやるもんか、という具合です。私は好き嫌いが激しいのです。しかし、イエスはこういった人たちをも愛されました。

さてこのような騒ぎの中で、一人孤独な人間、人々からきらわれ、悪評を立てられ、人生におそらく希望を大して持ってもいない、アルパヨの子レビ、後のマタイが出てきます。取税人だった彼は、後の箇所を見てもわかるように財産はあったと思います。人からの尊敬はうけていなかったけれども、裕福でした。どのくらいその仕事をしていたかわかりませんが、収税所にすわりながら、何を思っていたのでしょうか。皆に囲まれているイエスをザアカイがそうであったように遠くからながめ、自分はそこに行くことはない、とあきらめていたのかもしれませんが。彼には病気になったとき連れて行ってくれる友達とてほとんどいなかったでしょう。また同じ思想、心情を持つ仲間（律法学者）もいなかったと思います。知り合いと言え、ローマの役人か、自分の家の使用人くらいのものであったのでしょうか。イエスはこの忘れられた人に声をかけられたのです。しかも直接の弟子として、ともに生活していくために。イエスの愛はレビのような人にこそ注がれているのです。

不思議なものです。このレビにイエスは単刀直入に「私についてきなさい。」と言ったのでした。イエスにはどんな意図があったのでしょうか。あなたの問題を解決しようとか、得する話があるよ、とかそういう問題ではありません。言い換えれば、「私にはあなたが必要だよ」と言っていたのではないのでしょうか。それまでは、ローマの手下のようなもので生活のために仕方なく取税人をやっていた男が主イエスから「あなたは私にとって必要不可欠な存在である」と言われたのでした

声をかけられたレビはどんな気持ちになったのでしょうか。自分には安定した仕事がある。生活には困らない。一瞬は迷ったかもしれませんが。自分のことを全く知らない人から「あなたが必要だ」と言われたのです。おそらく、それまでは「お前の代わりはいくらでもいる」と言う世界で生きてきたのです。言い換えれば競争社会です。そこにイエスは全くちがう価値観を導入したのです。「あなたが必要です。」このとき、レビは何か吹っ切れたのです。それは彼が主の無条件の愛を体験した、ということではないのでしょうか。

私たちはどうでしょうか。中風ですか。病気ならば大変です。でもそんなあなたを見舞ってくれる人がいる、これは主の恵みです。感謝しましょう。

あなたは4人の友人のように誰かを助けていますか。あなたにはその能力がある。それが用いられています。幸せです。

律法学者のように何かこだわりを持って生きていますか。結構大変な生活です。努力もしなければならぬし、人の期待に答えなければならぬ、しんどい話ですが、尊敬も得られるし、権力も得られる。おめでとうございます。

でもほとんどの人はレビのようなのではないのでしょうか。日々の生活に追われている、何のために生きているかわからない。金があるとちょっと安心して調子に乗る。仕事仲間はあるが、友達と言えるかどうかかわからない。みなから忘れられたようなレビに対してと同じように、そんな人間である私たちに「ついてきなさい」、「私にはあなたが必要だ」と言われる主、その愛に心から感謝しましょう。